

平和教育分科会

加藤 容子 鈴木 一悠 田中 裕巳 徳井 輝雄
楨本 直子 丸山 豊 山田 孝

平和教育と生活指導

徳井 輝雄

【抄録】 平和教育を实践する立場から生活指導のあり方を見れば、生活指導は、平和な生き方を実生活の中で学ぶ格好の場である。一方、生活指導の望ましいあり方を考えるとき、平和教育は、生活指導の基本路線を与えてくれる。平和教育の立場からなされる生徒指導は、生徒集団内の民主的な人間関係のあり方と、集団内の要求の民主的な組織化の方法を学ぶものである。

【キーワード】 平和教育、生活指導、

1 平和教育からみた生活指導

平和教育は、日常生活で生かされてはじめて意義あるものとなる。これは一般の教科指導においても忘れてはならないことであるが、特に平和教育においては重要である。この観点にたつならば、学校での HR 活動の指導や生徒会活動・部活動の指導等いわゆる教科外活動の指導は平和教育の為の格好の場を与えてくれる。

現代社会が抱える諸問題～平和、民主主義、地球環境、人権等～に因應する為の教育をするには、受験の為だけの教科指導ではなく、学んだ知識を実生活に生かす能力の育成をめざした教科指導がまず必要である。そのためには教科指導至上主義から脱却して教科外活動の指導との有機的結合を図る必要がある。言い替えば、学校での、教科以外の活動の指導を学習活動の重要な形態の一つとして捉える必要があるということである。この立場にたつならば、生徒の個人及び集団での活動すなわち学級や生徒会活動の指導は、実践的総合的な色彩の濃い学習の場である事が分かる。従って、実践的な平和教育を目指すならば、生活指導は、平和教育の格好の場であると捉えられなければならない。

平和教育をどの様に展開するのかを考えると、中

学校・高等学校の教育をどうするかという基本に戻って見る必要がある。

中等教育には二つの面がある。一つは、次の段階の為の教育、中学では高校受験、高校では大学受験を目指す、いわゆる受験指導としての面である。今一つは、中等教育段階固有の教育目標を完成させる完成教育としての面である。現在ともすれば、父母の現実的要求にのみ答えての受験指導の面にのみ力を入れがちになっている。しかしこれでは何の為に学ぶのかと言った学習本来の意味を問ひながらの学習は成されにくい。たとえば、平和や民主主義について学んでもそれが生徒会活動に生かされないし、日常生活にも生かされない。ただ言葉を知っているだけで、入学試験に使われるだけである。平和教育は、完成教育の重要な中身であり、生き方を考えさせるものでなくてはならない。日本を、世界を真に平和なものにするには今後どうしていったら良いのかを学ぶと同時に現在の日常生活をどの様に送るのかということも摺んで貰えるものでなくてはならない。そのためには、平和教育を実践しようとする教師は、生徒の生活の中で生かされるように教える必要がある。そのためには平和教育を生徒の生活の中で行うことも重要である。即ち、平和教育は生活指導の中でも大いに実践する必要がある。

例えば、HR 活動の指導であれ、生徒会活動の指導

であれ生徒同士のトラブルに直面することがある。それに対処するためには、話し合いを重視し情報の交換を旨くするように指導する場合があるが、この中で、情報の交換と伝達・公開を旨くすることが、平和と民主主義を保障する基本的な条件である事を学ばせることができる。(資料1参照)

2 生活指導からみた平和教育

本来学校における生活指導の基本は、生徒が自主性に満ち、平和で民主的な集団生活を送ることに意義を見いだしかつその様に生活出来るようにすることである。

しかし、現在の教育の基調は「管理」である。何の為の管理か。従順な労働者、技術者、企業戦士を作るためであり、小数の教師で「効率がよく、安上がり」に大勢の生徒を教育するためである。管理教育は、学習指導面での受験戦争に勝ち残るための詰め込み教育を行い、生活指導では髪の毛の長さ、靴下の色、廊下の歩き方、便所へ行く時間、靴のかたち等細かいことに厳しくし、旧日本軍の内務班生活まがいの状況を作っている。管理教育は、教師集団をも上下関係で封建的に管理している。この様に、管理教育は、目に見えない暴力を、教師と教師、教師と生徒、生徒と生徒の間に生じさせている。即ち学校を反平和的な兵舎か刑務所のようにしてしまう。

本校はこのような「管理教育」を否定しているが、中学での最近の調査によれば教師からの体罰を受けたとするものが34%おり、上級生から納得できない扱いを受けたとするものが39%いる。本来、教育は、人間が健康で平和にくらすために行われるべきものが、今や、病人を作り、暴力を作る装置にもなっている。平和教育的生活指導は、この様な状況から教育を救う一つの突破口としても構築されなくては行けない。

世界が、米ソの冷戦が終わったとはいえ、依然として核戦略体系の中に組み込まれてしまっている現在、たとえば、国際紛争を平和裡に解決するといった人類が平和に生き延びて行くための知識と実践力をつぎの世代につけることが、教育に課せられた世界共通の急務となっている。数々の核兵器とその運搬手段及び命中精度の向上、はては宇宙戦争の研究までしている「高等教育」を受けた人たちの、その「高等教育」とは一体なんであったのか。ここに科学技術教育を初めとする教育一般のあり方が問われているのである。何の為の、誰の為の教育か。この事を教師も生徒も毎日毎日問いつけなくてはならない。そうすれば、あらゆる教科で、あらゆる教育の場面で、平和教育は行われなくてはならないこと、即ち、平和の探求こそ教育の基本

路線でなくてはならない事が多くのひとびとに理解してもらえるにちがいない。

このようにみえてくるならば平和教育は、生徒指導の基本方針としても非常に重要である。

生活指導を通じて平和教育をするのだ、と言う方針を持てば、生活指導の基本方針は次のようになる。

人間関係を旨く処理する訓練をする。人が2人以上集まればそこには必ずトラブルが生ずる。そのトラブルを暴力や理不尽な仕打ちなしに解決する方法を生徒が体得するように指導する。これはまさに平和な集団を作る基本であり、トラブルの民主的解決の現地訓練である。

自主的集団の中で自分達の要求をまとめ挙げる組織的訓練をすることも大切である。学級や生徒会活動の指針はまさにこれであり、これも民主主義の生きた教育である。

平和教育は、生徒指導の基本方針をあたえてくれると言う今一つの根拠は、生徒におかれた全国的状況の分析からも出てくる。

教育産業や子供をターゲットにした商業主義の隆盛に代表される物質的に豊かな社会は、子供達を次のような状況においている。

ものに頼る、大人に頼る。子供同士の競争。遊びの孤立化。我慢する力の不足。

こうした環境に育った子供達は、子供同士の紛争を旨く処理できずいじめや暴力を簡単に実行してしまう傾向にある。陰惨ないじめが殺人や自殺を招いている。これは、個人と個人、個人と集団の関係、集団同士の関係を正確に掴めず戸惑っている姿とも言える。

更に、各種情報の多様化と物質的「豊かさ」は価値観の多様化を産み、学校や教師及び親の情報提供面での生徒に対しての権威の低下をもたらしている。そのことは、1人の教師で40人から45人の生徒を世話しなければならない教育現場の実状では、生活指導の難しさを一層強めている。この事が先にみた管理至上主義の教育を存在させる一つの基盤になっている。(資料2参照)

学校での生徒集団をもうすこし具体的にみてみよう。以下は1991年度の、筆者を含めた本校生徒部が分析した、本校(中学・高校)の生徒像である。

(1) 多人数(クラスなどの集団)の中での人間関係がうまく行かない。特に、低学年で顕著。

◎ 親しい仲間内では話し合えるが、もっと大きい集団(クラス、委員会、議会、学年集会等)での討論が不得手。

代表者・・・討論主題等を的確に伝えることが出来ない。

一般生徒・・・親しくない者(代表者等)の

話に耳を傾けない。

◎ 親しい仲間同士では協力しあえるが、クラス全体への協力が出来ない。

◎ 集団の中での自己の役割分担への認識が不足している。ホームルーム代表、委員、班長等としての自覚不足。ルールを決めた委員のメンバーが自らそのルールを破る。

◎ 他人に厳しく自分に甘い。

(2) 気のあった同士の少人数集団がまとまれば教師の予想をやや越えるリーダーシップを発揮する。高校で生徒会行事の実施にあたって実行委員会形式が生徒に好まれる由縁はこれである。これら実行委員会は一般生徒を思うように動かす為には厳しい規制を作る傾向にある。

このような生徒を対象にした学校諸行事において、生徒が、みのりある自主的集団活動を展開できるようになるには、次のようなことが必要である。

- ① 仲間との協力が出来る
- ② 自分の考えを的確に分かりやすく伝える
- ③ 他人の話聞き相互批判ができる
- ④ リーダーが育つ

これらを目指して指導するには、それにふさわしい「場」が必要である。その主な場こそ、文化祭、体育祭等、生徒の自主的集団活動を必要とする学校行事である。しかし生徒会や委員会やホームルームを教師の全くの下請け機関にしてしまえば、上記の①～④の事柄や集団の自主性は身に付かない。教師が予めワクを決めてしまい生徒が話し合いで決める余地を非常に狭くしたり、生徒が自主的に話し合ったりすることを決めても、最後は教師の一言で生徒の出した結論と全く異なることが決まってしまう等のケースが重なれば、生徒は話し合いなどする気が無くなってしまい、かつ、指示を待つという受身の姿勢になってしまう。

3 様々な場面での望ましい生活指導の指針

3-1 先を考えた生徒指導のあり方を、学年を追って考える。

中学時代にその基礎能力を付けておく。

(1) 第一学年

教師主導で、グループのリーダー達を旨くまとめ、クラスのリーダーグループとして育てていく。

他人の話をしっかりと聞き、思っていることをはっきり述べる訓練をする

(2) 第二学年

教師はやや退いてリーダーたちを補佐し、彼らが困っていることや至らないところを見つけその解決を図る。例えば、文化祭や合唱コンクールの意義等についてクラス全体に話す。クラス討論が自分達だけで出

来るように促す。

(3) 第三学年

教師は、リーダー達の求めに応じて、企画の内容やスケジュールなどについて相談にのる。中学全体やクラス内での役割分担が自分達で出来るように指導する。

(4) 高校

リーダー達の立てた企画内容や指導方法のまずい点について注意を促す。例えば、連絡・情宣活動の不備不足等を指摘する。

(5) 全学年を通じて

民主的な集団づくりをめざす。そのためには、集団の中に、自由に物が言え、他人の意見に耳をかすという伸び伸びとした雰囲気は保たれるように常に配慮する。また、情報が全ての構成員に公開されその伝達が迅速的確であること、その情報をうけて、構成員一人一人が、頭脳を代表者や担当者だけに預けず、自分の頭で考える習慣を付けていくように指導する。

3-2 生徒会指導の力点

生徒会とは生徒の自治組織である事をまず押さえる。即ち生徒会とは、生徒の様々な要求を組織化し実現するための自主的組織である。

例 遠足が雨で中止になった

緊急に生徒議会議をひらいて他日遠足を行うことを教師側に要求

例 制服が着にくい

生徒議会議をつうじて改正を要求

異なった意見を、暴力を使わずに、一つにまとめ上げる方法を学ぶ事は、民主主義とは何かを実地に学ぶことになる。即ち、生徒会の指導は、民主的自主的集団活動の能力を育成する主な場となる。

自分達の事は自分達で決める習慣と能力をつける。これは、将来の自覚的市民即ち、行政当局に頼ってばかりいない市民を育成する上で重要である

次に生徒会指導の問題点を列挙する。

① 生徒管理の下請け機関化しない

生徒の集団的自主性の育成の立場と生徒管理の立場との矛盾対立が常に起こる。管理至上主義でいくならば生徒会を教師の下請け機関として置いた方が便利である。

② 教師の教育的要求を組織的に検討させる

学習環境を良くするために生徒側に自主と自律を要求する。教師側が一方向的に規則を作り押し付けるといことは避ける。生活や服装のきまりを生徒会を通じて生徒の意見を取り入れながら作った方がその決まりの遵守を説得力をもって厳しく要求できる。

③ ホームルールでの討論を成立させる

生徒会が執行部だけのものになることを避けるためである。

- ④ 生徒会指導を巡る教師間の意見調整を頻繁に行う
- ⑤ 中心的生徒グループの育成

生徒会執行部や生徒議会のメンバーに対する指導の中心は、十分な討論とその結果を一般生徒に伝えること及び一般生徒の意見を集約することを的確に行うように、事あるごとに注意を促すことである。

3-3 生徒会指導の場

- ① 学校行事を通じて

新入生歓迎会 球技大会 文化祭 体育祭 卒業生を送る会等がある。

- ② 生活規律等の日常生活でのさまざまな場面で起こる問題の解決をつうじて。これには、制服制帽 頭髪 カバン 盗難 ゴミ処理等の問題がある。

理想的には、生徒会の指導を通じて、学校作りへの生徒の参加を組織することが望まれる。

3-4 生徒会指導の実例～高校での制服問題～

生徒の要求

着脱不便 ダサイなどの理由で、①自由化して欲しい②改良して欲しい

教師の考え

①自由化でよい②現状でよい③変えれば良い④生徒の希望どうりでよい

父母の考え

①生徒の意見がまとまればそれを支持する②学校の判断にまかせる

これらを受けた生徒会の対応

制服問題専門委員会を設置して生徒の意見を集約する

アンケートの実施、クラス討論の実施、生徒議会での審議、全校討論会の実施 等の手続きを経て、半自由化を教師側に要求。

教師側の対応

生徒部を通じて教師集団の考えを生徒側に伝える。

一年にわたる論議の中でなるべく自由化したくないと言う考えが大勢を占めていくが、生徒の強い要求で半自由化案を1年間のみの試行という条件付で認める。

試行の結果を見て

生徒側 新しい制服を決めたいと新専門委員会の設置へむけ動く

教師側 制服制度をきちんと維持したいので望ましい結論が生徒側に出たという考え

が多数を占め、生徒の動きを静観

これらの根気強い論議の中で教師も生徒も、制服改正など教師と生徒間で起こる問題の民主的解決方法を学んで行く事が出来る。

3-4 学校行事の指導の力点

- 1) 学校行事とは

文部省の学習指導要領の記述によると
儀式的行事 健康安全・体育的行事 学芸的行事
旅行・集団宿泊的行事 勤労生産・奉仕的行事等案が
列挙されている。

- 2) 学校行事の特徴とその教育意義を次のようにとらえる

- ① 日常性の打破ができる
教育活動に節目、活気、変化等を与える
- ② 教科指導との有機的結合がしやすい
- ③ 民主教育 平和教育 環境教育 国際理解教育等総合的な学習の場を与える
- ④ 学級活動・生徒会活動の主な場である
学校行事への積極的参加によって学級作りが行われる

学行行事を生徒会に運営させることにより生徒会を育てる事が大事である。その場合教師や学校毎の教育姿勢が次のような場面で端的に現れる。

受験指導体制をめぐって

教科指導をめぐって

生徒の自主性の育成をめぐって

教師の労力をめぐって

- 3) 学校行事の民主的運営と指導

○教育目標の確認

学校行事の指導は、教育の一環としてみることの確認。行事を通じて何を指導するのかを確認

○運営への生徒の参加

学校行事の指導は、行事そのものの成功と同じ様に生徒の自主性の育成を目指すものでなくてはならない。すなわち出来ばえだけを追求するのではなく、行事を準備して行く過程をおおいに大事にする。生徒がどれだけ自主的に動いたかを評価の中心に据える事が大切である。

○生徒の自治組織の強化

自分達の事は自分達で決め、自分達で律する力量をつけるように指導する。

- 4) 入学式・卒業式等における日の丸・君が代の強制が生活指導にもたらすもの

これは、一般国民には教育への有無を言わせないという国家権力介入の象徴である。これは国、地域、職場、家庭において批判を許さない体制を作るのに役立つ。反平和的、反民主的集団を作るのに役立つ。国家→教師、教師→生徒、上級生→下級生なる封建的支配

の構造を学校教育の中に構築するのに役立つ。1人の教師で、45人の生徒を旨く管理できる生徒指導の基本精神としての盲従的愛国心をかきたてるかの幻想を与える。この有無を言わせない強制は、平和と民主主義の教育とは相容れないことであり、主権在民の精神とも相容れない事である。この強制は、学校行事の民主的運営と生徒の自主性の育成を目指した生活指導とは相容れないものである。この強制は、われわれに、教育は誰の為に、何の為に、行われるか？等の基本的問題を提起している。また、広く国民の言論出版思想の自由等の侵害とも深く関わってくる重要な問題である。

資料1 以下は、情報の交換伝達公開の重要性を文化祭の準備活動する中で筆者が生徒に伝えた一文章である。

生徒の皆さんが気持ち良く活躍するには、皆さん同士の情報交換が旨く早く正確に行われる必要があります。この文化祭総実行委員会のピラもそのための有力な手段です。

これまでの文化祭で、私が思い出す苦い経験の大部分は、生徒同士の誤解や連絡不十分に起因したトラブルです。とくに、コンクール形式の催しものの審査結果や審査方法などを巡るものです。係の者は、もうみんなの了解は取ってあると思っており、抗議する側は全然そんなことは決っていないと思い込んでいる、と言ったことがトラブルの原因でした。

連絡事項が正確に伝わっていないことからトラブルが起こることは避けたいものです。もし起こってしまったら双方が文化祭を成功させるにはどうしたら良いかと言ひ立場で冷静に話し合えばいいのです。しかし起こらないようにすることが一番です。そのためには、係の人は、決まったことを正確に上手に伝えるように努力し、きき手になる多くの生徒の皆さんはまず係の言うことを正確に聞き、その後疑問を質し意見があれば堂々と主張すればいいのです。

情報交換は、早く旨く正確に!!

資料2 大学2年生が、高校時代を振り返るなどして、管理主義教育が存続し続ける基盤について書いた小論の一部

〈例1〉まず第一に、保護者が、自分で行動を旨く律する事の出来ない子供を、旨く管理できていないから学校に任せてしまうこと。

次に生徒がだらしないこと。余りに常軌を逸した行動が多いため他の特に問題のないと思われる行動まで

規制しようとする事。教育側からすれば、画一的に規則規則でがんじがらめにすることの方が楽であること。何か問題が起これば、「校則にあるから」と逃げる事が出来る（高校時代いつもこれで逃げられた）

〈例2〉管理教育が存在するのは、教師にとって管理するのが楽だからだろう。と言うのは、生徒を或る枠の中にはめてしまえば、そこから出たときだけ教師は叱ればいいのだから、つまり教師にとって管理教育は叱る基準があってやり易いのである。例えば、制服がなくて服がある程度自由であったらどうか。もしも教室にネックレスやピアスをして凄くはでな女の子がきたとしよう。その時教師はその子に対してどう叱るだろうか。当然「そんなもの着て来てはいけない」と一言では方付けられないのだ。その子が納得するようにきちんと説明しなければならないのだ。その点校則があれば「それは校則で決っているから」の一言で片付けられる。他にも色々理由はあるかも知れないが、教師にとって管理教育が一番楽だから存在することはその理由の一つだと思う。

〈例3〉一生懸命な教師もいるだろう。なのに管理教育ははびこるのか。それは、クラスが大き過ぎるため教師がいちいち対応しきれないと言う面があると思う。現在のクラスの半分ぐらいにすれば、そして教師が真剣に教育を考えれば、靴下の色とか丸がりとかそんな非人間的な管理教育は無くなってしまおう。

〈例4〉生徒が家庭での躾をあまり受けていないせいか学校で教えることが多すぎる。大勢の生徒が通っているのだから、人それぞれな事をやらせていたら、それに対応するのに教師は疲れてしまう。

〈例5〉現代はいわゆる「受験地獄」と呼ばれる時代である。私の通っていた高校も、新設の進学校でバリバリの管理教育であった。教師の言われるままに勉強していれば大学には入れるといった感じであった。この高校に入学してくるものは学校の管理教育を充分承知していやだと思いつつも大学にはいるために入学するのである。大学受験用の勉強をしさえすれば大学には入れると言う今の受験の形態が無くならない限り管理教育はなくなると思う。実際に、管理教育の学校の方が高い進学率を上げているのだから。

参考文献 Ruth Fletcher Teaching Peace
Harper & Row Publishers (1986)